花咲かじじい

楠山正雄

青空文庫

一

むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがありました。

正直（しょうじき）な、人のいいおじいさんとおばあさんどうしでしたけれど、子どもがないので、飼犬（かいいぬ）の白（しろ）を、ほんとうの子どものようにかわいがっていました。白も、おじいさんとおばあさんに、それはよくなついていました。

すると、おとなりにも、おじいさんとおばあさんがありました。このほうは、いけない、欲（よく）ばりのおじいさんとおばあさんでした。ですから、おとなりの白をにくらしがって、きたならしがって、いつもいじのわるいことばかりしていました。

ある日、正直おじいさんが、いつものようにくわをかついで、畑をほりかえしていますと、白も一緒（いっしょ）についてきて、そこらをくんくんかぎまわっていましたが、ふと、おじいさんのすそをくわえて、畑のすみの、大きなえのきの木の下までつれて行って、前足で土をかき立てながら、

「ここほれ、ワン、ワン。
　ここほれ、ワン、ワン」

となきました。

「なんだな、なんだな」

と、おじいさんはいいながら、くわを入れてみますと、かちりと音がして、穴のそこできらきら光るものがありました。ずんずんほって行くと、小判がたくさん、出てきました。おじいさんはびっくりして、大きな声でおばあさんをよびたてて、えんやら、えんやら、小判をうちのなかへはこび込みました。

正直なおじいさんとおばあさんは、きゅうにお金持ちになりました。

二

すると、おとなりの欲ばりおじいさんが、それをきいてたいへんうらやましがって、さっそく白をかりにきました。正直おじいさんは、人がいいものですから、うっかり白をかしてやりますと、欲ばりおじいさんは、いやがる白の首になわをつけて、ぐんぐん、畑のほうへひっぱって行きました。

「おれの畑にも小判がうまっているはずだ。さあ、どこだ、どこだ」

といいながら、よけいつよくひっぱりますと、白は苦しがって、やたらに、そこらの土をひっかきました。欲ばりおじいさんは、

「うん、ここか。しめたぞ、しめたぞ」

といいながら、ほりはじめましたが、ほっても、ほっても出てくるものは、石ころやかわらのかけらばかりでした。それでもかまわず、やたらにほって行きますと、ぷんとくさいにおいがして、きたないものが、うじゃうじゃ、出てきました。欲ばりおじいさんは、「くさい」とさけんで、鼻をおさえました。そうして、腹立ちまぎれに、いきなりくわをふり上げて、白のあたまから打ちおろしますと、かわいそうに、白はひと声、「きゃん」とないたなり、死んでしまいました。

正直おじいさんとおばあさんは、あとでどんなにかなしがったでしょう。けれども死んでしまったものはしかたがありませんから、涙をこぼしながら、白の死骸を引きとって、お庭のすみに穴をほって、ていねいにうずめてやって、お墓の代りにちいさいまつの木を一本、その上にうえました。するとそのまつが、みるみるそだって行って、やがてりっぱな大木になりました。

「これは白の形見だ」

こうおじいさんはいって、そのまつを切って、うすをこしらえました。そうして、

「白はおもちがすきだったから」

といって、うすのなかにお米を入れて、おばあさんとふたりで、

「ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ」

と、つきはじめますと、ふしぎなことには、いくらついてもついても、あとからあとから、お米がふえて、みるみるうすにあふれて、そとにこぼれ出して、やがて、台所いっぱいお米になってしまいました。

三

　するとこんども、おとなりの欲ばりおじいさんとおばあさんがそれを知ってうらやましがって、またずうずうしくうすをかりにきました。人のいいおじいさんとおばあさんは、こんどもうっかりうすをかしてやりました。

　うすをかりるとさっそく、欲ばりおじいさんは、うすのなかにお米を入れて、おばあさんをあいてに、

「ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ」

と、つきはじめましたが、どうしてお米がわき出すどころか、こんどもぷんといやなにおいがして、なかからうじゃうじゃ、きたないものが出てきて、うすにあふれて、そとにこぼれ出して、やがて、台所いっぱい、きたないものだらけになりました。

　欲ばりおじいさんは、またかんしゃくをおこして、うすをたたきこわして、薪にしてもして

しまいました。

正直おじいさんは、うすを返してもらいに行きますと、灰になっていましたから、びっくりしました。でも、もしてしまったものはしかたがありませんから、がっかりしながら、ざるのなかに、のこった灰をかきあつめて、しおしおうちへ帰りました。

「おばあさん、白のまつの木が、灰になってしまったよ」

こういっておじいさんは、お庭のすみの白のお墓のところまで、灰をかかえて行ってまきますと、どこからか、すうすうあたたかい風が吹いてきて、ぱっと、灰をお庭いっぱいに吹きちらしました。するとどうでしょう、そこらに枯れ木のまま立っていたうめの木や、さくらの木が、灰をかぶると、みるみるそれが花になって、よそはまだ冬のさなかなのに、おじいさんのお庭ばかりは、すっかり春げしきになってしまいました。

おじいさんは、手をたたいてよろこびました。

「これはおもしろい。ついでに、いっそ、ほうぼうの木に花を咲かせてやりましょう」

そこで、おじいさんは、ざるにのこった灰をかかえて、

「花咲かじじい、花咲かじじい、日本一の花咲かじじい、枯れ木に花を咲かせましょう」

と、往来をよんであるきました。

すると、むこうから殿さまが、馬にのって、おおぜい家来をつれて、狩から帰ってきました。

殿さまは、おじいさんをよんで、

「ほう、めずらしいじじいだ。ではそこのさくらの枯れ木に、花を咲かせて見せよ」
といいつけました。おじいさんは、さっそくざるをかかえて、さくらの木に上がって、
「金のさくら、さらさら。
　銀のさくら、さらさら」
といいながら、灰をつかんでふりまきますと、みるみる花が咲き出して、やがていちめん、さくらの花ざかりになりました。殿さまはびっくりして、
「これはみごとだ。これはふしぎだ」
といって、おじいさんをほめて、たくさんにごほうびをくださいました。
　するとまた、おとなりの欲ばりおじいさんが、それをきいて、うらやましがって、のこっている灰をかきあつめてざるに入れて、正直おじいさんのまねをして、
「花咲かじじい、花咲かじじい、日本一の花咲かじじい、枯れ木に花を咲かせましょう」
と、往来をどなってあるきました。
　するとこんども、殿さまがとおりかかって、
「こないだの花咲かじじいがきたな。また花を咲かせて見せよ」
といいました。欲ばりおじいさんは、とくいらしい顔をしながら、灰を入れたざるをかかえて、さくらの木に上がって、おなじように、
「金のさくら、さらさら。

銀のさくら、さらさら」

ととなえながら、やたらに灰をふりまきましたが、いっこうに花は咲きません。するうち、どっとひどい風が吹いてきて、灰は遠慮なしに四方八方へ、ばらばら、ばらばらちって、殿さまやご家来の目や鼻のなかへはいりました。そこでもここでも、目をこするやら、くしゃみをするやら、あたまの毛をはらうやら、たいへんなさわぎになりました。殿さまはたいそうお腹立ちになって、

「にせものの花咲かじじいにちがいない。ふとどきなやつだ」

といって、欲ばりおじいさんを、しばらせてしまいました。おじいさんは、「ごめんなさい。ごめんなさい」といいましたが、とうとうろう屋へつれて行かれました。

青空文庫情報

底本：「むかし むかし あるところに」童話屋
1996（平成8）年6月24日初版発行
1996（平成8）年7月10日第2刷発行
底本の親本：「日本童話宝玉集（上中下版）」童話春秋社
1948（昭和23）～1949（昭和24）年発行
入力：鈴木厚司
校正：林　幸雄
2001年12月19日公開
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

花咲かじじい

楠山正雄

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/